

山岳遭難の現場から

～Mountain Rescue File～ No. 9

長野県警察山岳遭難救助隊



大型連休期間中、長野県内では28件の遭難が発生し、死者4人を含む31人が遭難しました。連休終了後も行方不明遭難が相次いで発生し、5月18日時点で県内では過去最多を記録した昨年同時期を上回る90件の遭難が発生しています。

本稿では4月17日に八ヶ岳連峰阿弥陀岳で発生した単独登山中の滑落遭難を取り上げ、改めて登山のリスクと遭難の実態を知っていただくとともに、最悪の事態を回避する具体的な対策について考えたいと思います。

〇残雪の八ヶ岳へ

Aさんは、神奈川県在住の74歳の男性で、テニスを趣味とするスポーツマンで、学生時代から登山に親しんでいましたが、退職を機に本格的に登山を始めたそうです。

Aさんの冬山経験は5年で、今回は以前も何回か登ったことのある八ヶ岳に挑戦することとしました。計画していたコースは、美濃戸口から入山し、南沢、行者小屋を経て、阿弥陀岳、赤岳を経由し地藏尾根を下降、南沢を下山するというもので、Aさんは、日帰りの予定で入山しました。このコースは、夏の標準的なコースタイムで約8時間半。健脚者であれば日帰りも可能なコースですが、Aさんが入山した4月中旬はまだ稜線付近には雪が残り、岩と雪がミックスする難しいコンディションでした。



Aさんが予定していた行程

Aさんは、早朝6時に赤岳山荘の駐車場に車を止めて出発し、行者小屋を経て中岳のコルへ上がり、計画どおり阿弥陀岳の山頂を目指しましたが、ルートの上の残雪が緩んで歩きにくく、トレースもなかったため、阿弥陀岳の登りで予想以上に時間を要してしまいました。

Aさんの計画では12時には阿弥陀岳の山頂に到着するはずでしたが、実際に山頂に立った

のは14時を回っていたそうです。Aさんは当時の状況について「心理的な焦りはなかった」と振り返っていますが、客観的に残りの行程を考えれば、決して「余裕のある行程」とは言えないでしょう。

○阿弥陀岳山頂から下山中、足を滑らせ滑落・・・

Aさんは、阿弥陀岳登頂後、赤岳へ向かうべく、阿弥陀岳山頂から岩と雪のミックスした急な稜線を下り始めました。登りでも難儀した雪が下りでもAさんを苦しめました。

溶けて緩んだ雪はアイゼンの爪も利きづらく、山頂から下り始めて程なくして、Aさんは雪に足を滑らせ南側へ滑落してしまいました。Aさんは、仰向けのまま100mほど滑落し、雪がたまっているデブリ（雪崩の堆積痕）のような場所で停止をしたそうです。



4月の阿弥陀岳（東方から撮影）

Aさんは、停止後、怪我の状況を確認めると、右足から出血があったものの、痛みは余り感じず、幸い自力歩行ができたことから、とりあえず体勢を立て直し、滑落の際に散らばった荷物を集めました。しかし、眼鏡やスマートフォンは見つけることができず、そのため現場から通報もできなかったそうです。

滑落した斜面から上を見上げると中岳のコルが見えたため、Aさんは「とにかく戻らなきゃ。コルまで行けば何とかなる」と意を決し、血のにじむ右足を引きずり稜線まで登り返すことにしました。

Aさんはやっとの思いで中岳のコルへ登り返し、そこから行者小屋へ向けて最短ルートの中岳沢を下ることも考えたそうですが、雪の状態が悪く、再び行動が遅れると思い、以前も通ったことのある文三郎道経由で下山することにしました。

途中から日も暮れてしまい、20時を過ぎた頃にはAさん自身もいよいよ自分が遭難しているとの自覚をしたそうです。

○計画書を頼りに

Aさんが自力での下山を試みている中、Aさんの家族は、日帰りで下山するはずのAさんから夜になっても連絡がなく、家族からの電話にも一向に応答がないことから、Aさんの身に何かあったのではないかと判断し、Aさんが家を出発する前に自宅に置いていった計画書を頼りに午後9時55分に八ヶ岳を管轄する茅野警察署に通報をしました。

計画書によれば、午前4時に自宅を出発、午前6時に赤岳山荘駐車場出発、行者小屋、赤岳、地蔵の頭、行者小屋を経て、午後4時に下山予定となっていました。通報を受け、茅野警察署が確認したところ、赤岳山荘駐車上にAさんの車が駐車されていることが判明しました。

茅野警察署ではAさんが何らかのアクシデントに遭遇し、下山できなくなっている可能性が高いと判断しました。

翌日の天候が下り坂であったことから、警察本部と協議し、翌早朝からヘリによる捜索と地上部隊による捜索を同時進行で行うこととしました。

○雪上に残されたトレースと血痕

翌朝午前6時20分に県警ヘリ「やまびこ1号」が松本空港を離陸、午前6時32分に現場上空に到着し、捜索を開始しました。捜索を始めて間もなくして阿弥陀岳山頂南側の雪の斜面上に滑落痕を発見、同時に滑落痕の下部からコルへ向けて登り返すトレースと所々に残された血痕が確認されました。

トレースと血痕を追跡すると中岳を経て文三郎道へと続き、やがて樹林帯に隠れてしまいました。「やまびこ1号」は燃料

の残量が少なくなったことから捜索を切り上げ現場を離脱しましたが、「トレースと血痕を発見」との情報は、時を同じくして付近を行動中の地上部隊にも共有されました。

地上部隊が行者小屋付近を検索すると、小屋の付近にも血痕が確認され、南沢を美濃戸口方面に向かうトレースも確認されました。トレースは蛇行を繰り返し、時折膝をついているような痕跡が見受けられました。

地上部隊がトレースと血痕を追跡し、午前7時55分に登山ルートから外れた雪上に座り込んでいるAさんを発見しました。発見時のAさんは、全身が濡れており、負傷した左足はズボンが裂け、大きく裂けた傷口からは血がにじみ出ている状態でした。救助隊員に対する応答も曖昧で、一見して危険な状態にあることは明らかでした。

後日、Aさんにこの時の状況について聞いたところ、「寒くて体の震えが止まらなかった。意識はあり、何か言っているのはわかったが、具体的な発語ができなかった」と振り返っているように、長時間行動の末、着の身着のままでオープンビバークをしたことで深刻な低体温症に陥っていたことが推測されます。隊員らは、直ちに負傷部位の止血等の応急処置を行うとともに、折りたたみ式の水筒を使った応急的な湯たんぽでAさんを加温し、お湯を飲ませるなどして回復に努めました。しばらくすると徐々に受け答えもできるようになり、程なくして発見



捜索ヘリから発見された滑落痕と血痕



雪原にうずくまるAさんを発見

の知らせを受けて再度フライトした「やまびこ 1 号」が上空に到着し、午前 8 時 52 分、A さんを収容し、松本市内の病院に搬送して救助活動が終了しました。

○登山計画書がつないだ命

今回の事例は、冬でも岩肌がむき出しの八ヶ岳の稜線で約 100m 滑落しながらも、雪のおかげで致命的な負傷を免れたという「運」に助けられた側面が大きい事案とも言えますが、携帯電話を紛失し、連絡手段を失った A さんの窮地を救ったのは、出発前に家族に残した計画書だったと言えるでしょう。

前日の夜に残された計画書に基づいた家族からの具体的な通報がなければ、翌早朝のヘリ捜索や地上部隊の投入はできませんでした。そうなれば A さんの発見は遅れ、南沢で一人動けないままさらに深刻な状態に陥っていたかもしれません。

スマートフォンの地図アプリ、登山者用発信器、衛星通信を利用した小型 GPS 通信機器など、近年の通信技術の進歩に伴って登山中の現在地を知らせる機器やシステムは急速に発達し、普及をしています。実際の遭難救助活動においても、それらが有効に活用され、早期発見、救助に繋がった事例も多数あるのも事実です。

しかし、そのような機器やシステムも今回の事例のように滑落によってスマートフォンを紛失したりすれば、全く効果を発揮しませんし、機器の故障やシステムトラブル、バッテリーの消耗等のリスクもゼロとは言い切れません。

A さんは、日頃から登山に行くときは紙媒体の登山計画書を家族に託し、登山口のポストに投函して入山したそうですが、昨今はインターネットで手軽に提出できるようになっています。専用のポストが設置されていない登山口もあるため、長野県ではインターネットで提出し、印字したものを家族や友人に託すといった活用方法を推奨しています。

○登山のリスクに向き合う

この春、長野県内では、単独で入山したまま行方不明となる事案が相次いで発生しています。搜索の結果、遺体となって発見されたケースもあれば、入山から数日、場合によっては数週間後に届出がなされ、有効な手掛かりに乏しく未だに発見されないケースもあります。メディアや SNS で喧伝される山の美しい景色や素晴らしい体験の裏側には、そのような厳しい現実があることをどうか忘れないでください。

また、そのような「最悪の事態」がご自身にも降りかかる可能性があることをどうか忘れずに、登山計画書の提出、共有、地図アプリの活用等できる対策を万全にして、登山を楽しんでいただきたいと思います。

終